

単元：ボール運動 ゴール型 トリオハンドボール  
学校・授業者：港区立港南小学校 世取山拓平 主任教諭  
授業日：令和3年11月4日(木)

## 1. 研究協議より

Q ポストの役割についてはどうだった？ポストも打ちたいという思いはなかったか？

A 初めのルールとして押さえていたので、特に声は上がらなかった。ディフェンスの力が高まってきたときに、使う。

Q 個人の学習課題とチームの学習課題のつながりは？

A ボール運動の特性を味わわせるためにも、チームと個人は切り離せない。5年生の段階では、作戦の3観点を関連付けて考えることは難しい。チームと別のところで自分の思いをもっている。単元前半は効果的な動き方を理解させたいので、どうチームに貢献できるかを考えさせる。チームの作戦から個の学習課題を見いだしていく。トリハンだけでなく、他のボール運動も通して、身に付けていく。

Q 子供同士の声掛けが少なかったのではないか？前時との違いは？

A 活発にアドバイスをし合う学級ではないが、前時よりか声掛けは増えていた。6年生の実証授業では、試合を見ている人数が多かったため声掛けが自然発生していた。記録担当でいっぱいになっていたところがある。

Q 「男子と女子のめあての乖離があるチーム」「負け続けているチーム」に具体的にどう支援したのか？

A 課題解決に困難があるチームに積極的に入った。女子には動き方が十分に身に付いていないため、動き方について教えるようなかわり。男子には、他の人がボールを持っている時にどう動いたらよいかを支援するような声掛け。ボールを持たないときの動きを具体的に支援した。

Q トリハンを子供たちがどれくらい楽しんでいるのか？三つの資質能力をバランスよく育むためには？学びに向かう力がベースになってくると思うが、そこについてはどうとらえているか？

A 形成的授業評価において、意欲・関心が徐々に高まっていることから、見た目以上に子供たちは楽しんでいたと考えられる。学級の実態で、勝敗にこだわりすぎてしまい授業に向かない児童が多くいる。学級経営として、勝敗だけでなく考えることも大切にしているため。

Q 子供たち同士をつなげていくために、教師がどのように問いかけていったのか。

A ゲームの途中でも振り返りができるような言葉掛けを入れていった。そのため、チームとしての振り返る力が高まったり、次のゲームに活かしていったりできるようになってきている。

Q チームの特徴をどのように捉えさせていったか？

A チームに対して貢献しようとする姿がチームの特徴。貢献しようとする姿がゲームを通して、課題が明確になっていき、ゲームの中で貢献できることが明確になってくることで、チームの特徴がはっきりとしていく。

Q 「一人一人の学習課題をチームとして解決していく」ことについて、ボール部としてどうとらえているか？

A 例えば桃「パスをうまく回していく」という学習課題に対して、その子だけでなく、チームに「パスを回しやすくするにはどうしたらよいか」を問いかけていく。

Q ICT をどのように活用したか

A Google のクラスルームや Teams で撮った動画をためている。授業内の振り返りだけでなく、休み時間にも自然に見ることができる。

## 2.指導・講評

(1)講師 東京都教育委員会 指導主事 渡邊徳人 先生

(2)内容

①本日の授業を参観して

「今日の授業は〇〇が楽しい授業」(児童の視点で)

- ・ボールがよくつながってシュートが入って楽しい授業
- ・パスがつながったことが楽しい授業

→本時において味わわせたい「楽しさ」がどこだったのか？が大切。

渡邊先生からは、「今日の授業は、自らの課題解決が、チームの勝利につながることを楽しい授業」とご意見をいただいた。

②本單元における「深い学び」とは

- ・試行錯誤を重ねているか
  - ・思考に深まりがあるか
  - ・見方考え方を働かせているか→「その価値や特性に着目して」が重要なポイント
- 楽しむ=「競い合う楽しさ」「友達と力を合わせて競争する楽しさ」

③一人一人の子供が学習課題を見いだすための手立ての工夫

<トリハンとの出会い>

◎「ルールを理解」「ゲームの行い方」を、動画等を使ってできた。

→イメージをもって1時間目のゲームができる。

<記録カードの活用> 紫チーム 0勝7敗1分

→ボールをもらった後の判断が早くない。ボールを持っていないときの動き方がわからない。1番の子が中心となっているチーム。児童の振り返り：「パスはできたけど、シュートが少ない。それはわかっているんだけど...。」

◎自分たちが振り返りで何をしなければいけないかを考えられることが大切=思考力の深まり

<ICT の利活用>

△自分たちの動きを客観的に見て原因を把握するためにも、ICT を活用した方がよいチームがあった。

- ・理想と現状の差を埋めるためのものが「学習課題」
- ・授業内外で、自分たちや他チームの動きを客観的に見ることでチームの状況を知り、適切な学習課題をもつことができる。
- ・学習課題の持ち方に順序性はないが、単元後半であれば「チームの課題」を意識させたい。チームの課題と個の学習課題が密接にかかわりあっているチームは、高まりがみられる。

△記録カードも ICT も「使うか」「使わないか」子供たちに任せ、判断させることが必要  
=一斉一律からの脱却

<チャンピオンコート戦>

△下位チームにも、振り返りの時間や客観的に見る時間も必要だったのではないかな？

△運動時間の差をどのように埋めるか

④最後に（渡邊先生より、授業をつくる際に大切にしている視点として以下の二点をあげられた）

- ・学習指導要領の改訂において「運動が苦手、意欲的ではない児童への配慮」が重要視されている。
- ・ウィズコロナ、ポストコロナを見据えた小学校体育科の在り方を今後も考えていく必要がある。